

こ ぎ こ 小 木 の 子



富士第二小学校

学校だより

令和4年6月28日

梅雨の季節です

梅雨に入り、子どもたちは運動場に出て遊べない日が増えています。感染症防止対策として、昼休みの運動場使用を奇数・偶数学年で分けて1日おきとしていますが、雨が降るとそれが先に延びるので、子どもたちは雨が止むのをひたすら祈っています。



天気の良い日は、昼休みの始まりを告げるチャイムが鳴ると同時に、堰を切ったように昇降口から子どもたちが飛び出していきます。それまで静かだった運動場が、たちまち子どもたちの歓声と活動の音でにぎやかになります。およそ20分強の間めいっぱい活動し、教室に戻っていく子どもたちの顔は、汗をかき上気して生き生きとして見えます。その顔を見るたびに、遊びは子どもたちの活力源なのだなと感じます。

一方雨天時には、子どもたちは読書やお絵描き、タブレットが使える学年ではタイピング練習などをして校舎内で過ごします。そのような日は床が滑りやすくなるので、怪我をせずに安全に落ち着いて過ごせるよう、子どもたちに呼びかけています。

さて、雨が降ると何となく気分が憂鬱になったり、予定していた学校行事の実施の判断に頭を悩ませたりとあまりうれしくはないのですが、この雨がないと困ることがたくさんあります。その一つが水田の稲です。この時期の雨は、稲が実を結ぶために重要なものなのだそうで、私たちが毎日食べるお米のためにはなくてはならないもののようです。

ところで、梅雨の時期である6月を、旧暦では「水無月(みなづき)」と呼びます。梅雨なのに雨の無い月とは変だなと思い、インターネット上で検索して調べてみると次のような説が紹介されていました。

- (1) 「無」はもともと「無い」という意味ではなく、「の」にあたる連体助詞の「な」である。だから「水の月」という意味であるという説。
- (2) 田植えの時期、水の無かった田に水を張るので「水張り月」が変化したという説。
- (3) 昔の6月は、今の暦では7月頃となり、梅雨が明け、暑くなって水が干上がることから、文字通り「水が無い月」という説。

この他にも説はあるようですが、共通しているのは、四季の移り変わりや農業の大切な時期を表しているということです。昔の人々がいかに豊かな自然を大切にし、共に生活してきたかが、この6月の別名からも感じ取れます。

先日は、5年生がみどりの学校を行い、子どもたちは様々な草木の名前を見知ったり溶岩でできた地形を体験したりと、自然の中での生活を満喫してきました。そのような行事も一環としながら、先人が残してくれた豊かな自然や四季に応じた生活や習慣を大事にしていきたいです。



富士二小ホームページのトップページをリニューアルしました。子どもの活動の様子を紹介していますのでご覧ください。あわせて「けやきﾌﾟﾛｸﾞ(PTAﾌﾟﾛｸﾞ)」もご覧ください。